

8月4日 平和聖日礼拝「比べないと分からないのか!？」マタイ 25:14~30

聖書にはイエスが語られた赦しの言葉がたくさんあります。「マタイ 5:38 悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。」
「マルコ 11:25 立って祈るとき、だれかに対して何か恨みに思うことがあれば、赦してあげなさい。そうすれば、あなたがたの天の父も、あなたがたの過ちを赦してくださる。」 どうしてイエスはこんなにも赦しにこだわったのか？それはイエスの時代のイスラエルにはローマ帝国との戦争に破れて、厳しい支配に苦しむ人々が大勢いたからです。イエスの活動したガリラヤ地方は特に激しくローマに抵抗した地域でした。イエスはローマ軍に殺されたり傷つけられ、悲しんだり、苦しんでいる人たちを大勢見て育ったことでしょう。またイエスは大工でしたので、戦災地域に家を建てるために父ヨセフと共に回ったことでしょう。家を焼かれ、故郷を荒らされ、ローマ人を憎み、怒りに燃える人々にも出会ったことでしょう。そんなイエスだからこそ、平和の道を説いたのです。イエスの赦しの言葉の究めつけはこんなものです。「マタイ 5:44 **あなたがたも聞いておくとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言うとおく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。**」たとえ敵であっても赦しなさいと言うのです。なぜか？先週もお話ししました。私たち自身が神さまに、イエス様に私たちの罪を赦され、贖われているからです。私たちが愛されているからです。だから私たちも同じように人を赦し、互いに愛し合って生きるよう呼びかけられています。「マタイ 5:9 **平和を実現する人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる。**」私たちが平和を実現するために生きるのです。

さて、今年もこの季節がやってきました。「八月や、六日、九日、十五日」詠み人知らずとも言われている句ですが、私たちの住む日本にとって大切なこの季節のことをシンプルに伝えていると思います。広島、長崎に原爆が落とされ、終戦記念日を迎えたのです。もちろん、唯一地上戦が行われた沖縄のことも、日本中が焼け野原になったことも、この戦争を通して私たちの国が近隣諸国の人々を傷つけたことも決して忘れてはなりません。この季節、私たちは日本に生きるものとして、神さまから**特別に**与えられた使命として「平和」を祈り、求めるのです。

ところで、多度津教会にとって「平和」とはどういうことでしょうか？もちろんお一人お一人に出来ることを真剣に考えて頂きたいと思いますが、多度津教会として忘れてはならないことが一つあります。それは子どもたちのことです。私たちの教会には附属の愛光保育園があります。「子どもたち」を抜きにして多度津教会が平和を語ることは

出来ないでしょう。先ほど歌った 371 番「この子どもたちが」は私の大好きな讃美歌です。

この子どもたちが 未来を信じ つらい世のなかも 希望にみちて 生きるべきいのち

生きていくため 主よ、守りたまえ、平和を 平和を

子どもが与えられた今、なおさら歌わずにはおられません。今日は子どもたちと平和のことを語りたいと思います。

今日は有名なタラントンのたとえを聖書から聞きました。ある人が旅に出ることにした。3人の召使を呼んで、お金を預けた。ある人には5タラント、ある人には2タラント、ある人には1タラント。二人の召使はそれぞれ自分で商売をして10タラント、4タラントに増やした。けれども、最後の一人は預かったお金を地面に穴を掘って隠しておいた。さて、主人が帰ってきて、お金を預けた3人を呼び集めた。頑張って商売してお金を増やした2人は良く頑張ったね！ととっても褒めた。でも、お金を隠していた一人は怒って家の外に放り出してしまった。

芸能人のことをタレントと言いますが、この譬えはタレント（才能、能力）という言葉の語源にもなった話で、よくキリスト教主義学校などでも教えられる有名な話です。みなさんはこの話をどう思われるのでしょうか？私は長い間、良くわからなかったのです。と言うのも追い出された召使はあまりにかわいそうで、主人はひどいパワハラだと思いませんか？これは天の国の譬えなので、主人とは神さまのことです。神さまちょっと酷すぎじゃないか！？なんてことも思います。ですが、最近子ども達を取り囲む環境のことを考える中で、この話についても考えさせられるようになってきました。

先日、関学のユースキャンプにスタッフとして参加してきました。今回のテーマは「こんなんでもええねん！」ちょっと変わったタイトルですね。テーマは講師をされた長崎のミッションスクールで聖書を教えておられる方が決めてくださいました。このテーマには講師の長い教員生活の中でのこんな問題意識から決めたそうです。「今の子どもたちはとにかく自信がない。自尊感情（自分を大切に作る気持ち）がない。『自分なんて役立たずだ』『自分なんて生きていても何の意味も無い』そんな風に思っている生徒が大勢いる。そして、目立つことを極端に怖がる。すぐに『いじめ』に繋がるからだ・・・」

子どもたち（若い世代）が自信を持ってない、このことは、キリスト教保育や教育などあらゆる分野で盛んに言われ、データなどでもはっきりしています。平成25年度に内

閣府が行った若者の自尊感情に関する調査では、「私は自分自身に満足している」という項目で日本は45,8%に対して、韓国75、アメリカ86、イギリス83、ドイツ80、フランス82、スウェーデン74と圧倒的に低くなっています。どうしてこんなに自信がないのでしょうか？いくつか言われていますが、一つにあまりに他者と比較され過ぎていることが挙げられています。大人が子どもたちを比べすぎるのです。テストの点数、スポーツの成績、授業の態度、あらゆるものを点数化され、比較されます。そして結果だけが重視され、努力の過程も見てもらえません。それは大人の社会もそうかもしれません。売り上げ、お客さま満足度、効率性、ありとあらゆることが数字化され、見える化され、比較されます。比べられ、相対化されると、私たちは誰かとの比較のなかでしか自分に満足できません。～と比べて良い、悪いでしか自分の価値を判断できなくなるのです。

タラントンの話でも一緒ではないでしょうか？追い出された僕はどうして与えられたお金でチャレンジしようと思えなかったのでしょうか？タラントン、幾らくらいだと思いますか？およそ20年分の給料です。今、年収の平均は高卒で1億9000万円だそうです。生涯20から60歳まで40年働くとしてその20年分ですから1億円くらいでしょうか？そう、実はびっくりするくらいたくさんのお金を召使は預かったのです。それなのに、チャレンジしようとしなかったのです。なぜか？・・・きっと隣の人と比べたからだと思います。5タラントン、2タラントンと比べた途端自分に預けられている1タラントンはとっっても少なく感じてしまった。自分に自身がもてなくなってしまったのではないのでしょうか？先ほどの調査でもう一つ、日本がずば抜けて低い項目があります。「うまくいくかわからないことにも積極的に取り組む」です。他の国が80パーセントくらいに対して、日本人の若者は50パーセント程度です。僕は他のものと比べて少ない自分の額を見て、商売にチャレンジする気持ちがなくなってしまったのです。

この譬えのタラントンを「才能」だと思える人は大勢います。でもこれはそもそも神さまが私たちにくださっている「恵み」のことです。ですから、「才能」に限られたものではありません。もっともっと大きな神さまが私たちに与えて下さっているあらゆるものを指しています。今日も私たちは神さまからたくさん恵みを受けています。たべものや着るもの、家族や友達との出会いが与えられています。信仰も当然含まれるでしょう。なにより「いのち」というタラントが与えられています。それらは莫大で数えきれないはずですが、けれども、それらが本当にちっぽけで頼りないものに思える瞬間があり

ます。もう隠してしまいたい、持っていてはどうせ無駄だと思ってしまう瞬間があります。「自分は何の役にも立たない」「生きている価値が無い」と思える瞬間が・・・それが、他の誰かと比べる時なのです。本来比べようもないはずのものを比べようとするとき、その本来の価値がなくなってしまいます。せっかくのタラントンは輝きを失うのです。

少し前のことになりますが、神奈川県の川崎市でスクールバスを待つ子どもたちの列が刃物を持つ男に狙われる事件がありました。2人が亡くなり、事件を起こした者もその場で命を絶ちましたので、動機や真相も分からないままです。けれども、事件を起こした男性の生い立ちを探ってみると決して恵まれた環境で来たわけではないことが分かりました。小学低学年の頃に両親が離婚し、両親ではなく伯父夫婦に引き取られます。中学の時から不登校となり、その後はほとんど社会と関わることなく引きこもり、同居していた伯父叔母とも話す機会もほとんどなかったそうです。今回狙われた私立小学校は彼と同居していた従姉妹の通っていた小学校だったそうです。同じ家に住みながら、一方は親に見捨てられ公立の学校で馴染めず不登校に、一方は小学校から私立に通い順調な人生を送る。恐らく、共に育った従姉妹への妬みや恨みからだろうと考えられます。この男性の犯したことは到底赦されることではありません、ですが、やっぱり同情の余地はあるのではないのでしょうか。彼は自らその場で命を絶ちました。自分自身の命を全く大切にできなかった、だからこそ、他者を傷つけ、他者の命を平気で奪えたのです。それは、人の価値、いのちの価値を比較することでしか表せない私たちの社会にも問題があるのではないのでしょうか。このことについてある牧師がこんな風に書いていました。「このような事件は厳罰化や取締りを厳しくすることでは決して防げない。なぜなら犯人は自分のいのちを何とも思っていないのだから。このようなことを二度と起こさないために私たちに出来ることは、子どもたちを愛して、自分と他者を愛することができる子どもたちを育てていくことだけだ！」

今、子ども達の現状はとても厳しいです。あらゆる面で比べられ、ランク付けされる。本当に窮屈な中で生きています。そんな中には、神さまから与えられている賜物に気付けません。タラントを磨くことなんて出来ません。私たちは自分に与えられている恵みを比べなければ分からないのでしょうか？ 幸せは誰かとの比較でしか味わえないのでしょうか？ そんなことはありません。神さまの目から見てわたしたち一人一人は高価で尊いのです。私たちは他の誰でもない神さまから愛されているのです。

今回の関学のユースキャンプでもいろんな背景を持つ若い世代の人達が集まっています。高校を中退せざるを得ず、親の支援もなく生活におわれながら孤独に生きてきた青年、親からネグレクトを受け親戚に育てられた女性。色んな悩みを抱えながらも、聖書に触れ、神様の愛に触れ、自信を取り戻して、前向きに生きていこうと変えられる姿には本当に涙が出ました。

教会は今、大切な時期を歩んでいると私は思っています。真剣に「いのち」の価値を発信していかなければなりません。神さまの愛を伝えるキリスト教保育は本当に大切なのです！私たちは愛光保育園を通じて、子どもの教会を通して、子どもたちを守り、愛し、育てていかなければなりません。世界に神さまの愛を発信しなければならないのです！「牧師が愛光で説教してれば良い」「愛光の職員が教会員になってくれたらいいのに」そんな他人任せにしている場合ではないのです。今日の日、平和聖日を私たち一人一人のものとして真剣に受け取りたいと思います。私たち一人ひとりが「平和を実現する者」としての使命を帯びています。ここに集まった一人一人が神さまから託されている課題はきわめて重いです。共に、平和を祈り、求めて、行動していきましょう。「求めなさい、そうすれば与えられる！」